

#38

植木職人

木の未来を考えて手入れをする



今回のゲストは植木職人の加藤木龍雅さんです。
加藤木さんは「体を動かす仕事に就きたい」と、園芸科のある高校で造園を学びました。高校卒業後、安政3年（1856年）から続く造園会社に就職して、まもなく1年がたちます。親方や上司の下で、日々技術を磨いている加藤木さんに、植木職人の仕事の魅力や難しさ、やりがいについて伺います。

MC・リポーター
米野真織

植木職人の仕事とは

公園や街路、神社やお寺、個人の家の庭など、暮らしの周りにある樹木の手入れをする仕事です。枝や葉を切ったり、病気や害虫を防ぐために消毒をしたり、雑草を取り除いたりします。造園まで手がける場合は、木だけではなく石や柵などの配置も含め、空間全体を美しく整えます。樹木の性質をよく知り、日当たりや土壌などの環境を見極め、枝葉が伸びた後の状態まで想像するなど、総合的な知識と判断力が必要な仕事です。

植木職人として働くためには

造園会社などに就職するのが一般的です。加藤木さんのように、高校や専門学校、大学などで造園について学んでから就職する人もいれば、就職した後に仕事を通して技術を身につける人もいます。植木職人になるために特別な資格はありませんが、関連する資格にはさまざまなものがあります。加藤木さんが取得した国家資格の「造園技能士」もその一つです。



植木職人 加藤木龍雅さんに聞きました！

米野 : お若い印象ですけど……今おいくつですか？

加藤木 : 去年（2020年）高校を卒業して19歳です。

米野 : 高校を卒業してすぐ今の職業に就かれたってことですか？

加藤木 : はい、そうです。

米野 : ということは、今がんばって仕事を覚えているまっ最中ですか？

加藤木 : はい、そうですね。あと、高校のときに造園科目がある高校に通っていたので、そこで学んだことと、資格試験でやったことや、全国大会に出場させていただいたときのことを踏まえて仕事してるって感じですね。

米野 : すごい！ 資格っていうのは、どういった資格ですか？

加藤木 : 造園技能士検定という試験です。

米野 : 何級とかいうのがあるんですか？

加藤木 : 3級、2級、1級とあって、自分は高校のときに2級まで取りました。

米野 : 全国大会っていうのは……？

加藤木 : 技能五輪全国大会という、23歳以下の職人たちで庭造りののきを競い合う大会なんですけど、それに出場させてもらいました。

米野 : 実際どういうことをされるんですか？

加藤木 : 庭造りです。2日間かけて10時間で造るっていう大会でした。何も無いところに石を置いてみたり、あと木を植えたり、庭の雰囲気上げるために境界を打つ…ま、垣根ですね……竹を使った境界を作ったりして、ひとつの庭を造っていきます。

米野 : ちなみに結果はどうでしたか？

加藤木 : 入賞することはできなかったんですけど、その学生の中の学生賞という賞をいただきました。

米野 : そうなんですね。23歳までってことはまだ出場できますよね。

加藤木 : そうですね。チャンスはあります。

米野 : 狙ってますか？

加藤木 : ちょっと出たい気持ちはあります。

米野 : そうなんですね！ 今回は、高校で園芸を学んで植木職人としてのキャリアを歩み始めた加藤木さんに、なぜこの仕事を目指したのか、そして、どんなおもしろさがあるのか、聞いていきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

加藤木 : よろしく申し上げます。



木の未来を考えながら切る

米野 : 加藤木さんは、どんな会社で働かれてるんですか？

加藤木 : 安政3年(1856年)から続いている会社で……。

米野 : 安政3年?!

加藤木 : はい。そこの親方が5代目になるんですけども、厚生労働省から現代の名工として表彰された職人さんの下で働かせてもらっています。

米野 : すごく歴史がある会社に就職されたんですね。

加藤木 : そうですね、ありがたいことに。

米野 : ちなみに、社員さんはどれぐらいいらっしゃるんですか？

加藤木 : 親方含めて4人で、自分と、あと上司1人と同期が1人いまして、その4人で働いています。

米野 : 上司の方はおいくつぐらいですか？

加藤木 : 40歳ぐらいですね。

米野 : じゃあ結構、間が空いたんですね。

加藤木 : はい、そうです。

米野 : でも、すごく勉強になりそうな環境ですね。

加藤木 : そうですね。ありがたいことに。

米野 : 具体的にはどんな場所でお仕事をされてるんですか？

加藤木 : そうですね。僕はお寺や、神社や、個人の庭などの手入れなどを行うところで働いているんですけども、造園業には2つ種類があって、僕らがやってる「民間」の仕事と、あと「公共」という公園などの管理や公園造りを主な仕事としたところがあります。

米野 : 民間の仕事では、どういうふうに仕事が進んでいくんですか？

加藤木 : お客様から依頼を受けて、親方が下見に行って仕事の計画を立ててくれるんですけど、上司や親方たちと(現場に)行って、上司からの指示を受けながら仕事をこなしていくっていう形になります。

米野 : 木を植えたり、木を切ったりっていう作業を実際にされることが多いですか？

加藤木 : はい、そうですね。一般的にはそんな感じで進んできます。木を根元から切ってその場所から木をなくしたり、垣根というもので境界を造ったりするのが多いです。

米野 : どんなことに気をつけながらお仕事をされてますか？

加藤木 : 一番気をつけているのは、木の手入れをするときに、絵に描いたような樹形になるように仕上げることです。

米野 : 「樹形」というのは、「樹木の樹」に「形」で合ってますか？

加藤木 : はい、そうです。一応全体が樹形なんですけれども、葉っぱがあるところの形を意識しています。

米野 : ああ。一本の根元から上の緑まで合わせての木の形で。

加藤木 : そうですね。

米野 : 加藤木さんは、その一本の樹形を気にするのか、全体の何本かある木の全部の樹形を気にするのか、どこを捉えてますか？

加藤木：そのときにもよるんですけども、木の大きさによって、何本かあるとしたら、一番大きいやつが一番力強く見えるように緑を濃くしてみたり、あと小さい木が大きい木の邪魔にならないように切ったりします。

米野：日当たりとかも意識されるんですか？

加藤木：そうですね。やっぱり日が当たってる方向だと木の伸びるスピードが速いので、そっち（の方向）や、木の元のほうで大きく切ってあげたりして調整してます。

米野：うーん。とても難しそう。見た目だけじゃダメってことでもんね。

加藤木：そうですね。あともう一つ言うと、葉っぱの濃さが全体的にちょうどよくなるようにしていますね。葉っぱの密度のことなんですけれども、木を切っていくって濃いものをだんだん薄くしていくんですけども、なくしすぎると薄すぎてしまうのでその調整が難しいんですけど、そこに気をつけてます。

米野：伸びたところを切っていくっていうわけではないんですね。

加藤木：はい、そうですね。今だけじゃなくて、木の未来のことを考えて切っています。

米野：写真に撮ったりされるんですか？

加藤木：はい、します。切る前と切った後の比較とか、あと、切った木を1か月した後に見て、どんな伸び方をしているとか、未来を見据えてちゃんと切れているのかを確認したりします。

米野：1か月後を予測して切ったけど、「違う！」ってことが起こったりしますか？

加藤木：ありますね。なんか汚かったり、あと、切らなきゃいけない枝が切れてなかったりすると、1本ピョコンと出たりしているので、かなり気になります、そういうのを見ると。会社まで行く道に現場があったりするので、そこをチラッと見て、「よくないな」とか（笑）、「いい感じだな」と思ったりもします。

米野：でも、未来を想像するってすごく難しくないですか？

加藤木：そうですね。「かなり難しいな」と自分も思ってたんですけども、入社面接のときに親方から「シンプル・イズ・ベスト」と言われて、「飾らなくていいよ」ということで、それを今考えてやっています。あとは、そのときに「造園はオーケストラと一緒に」と言われたので、そういうことも考えながらやっています。

米野：それはどういう意味ですか？

加藤木：「オーケストラっていうのは、いろんな楽器が交わりあって一つのものが完成する。それと一緒に、造園も木と、垣根と、石があって、すべてがちょうど重なり合ったときに1個の作品が完成するよ」と言われたんです。それが自分のやってる仕事の中でも大きく効いていると思いますね。

米野：うーん。モットーみたいな。

加藤木：そうですね。

米野：カッコいい親方ですね。すごく。

加藤木：そうですね。

“緊張しかなかった”初めての仕事

米野 : 加藤木さんの高校は、園芸が専門の高校なんですか？

加藤木 : いや、3クラスあって、園芸科と、食品科と、動物科に分かれていました。僕は園芸科で園芸のことを学びました。

米野 : 1年生のときから園芸コースですか？

加藤木 : はい、そうです。

米野 : じゃあ、もともと植物に興味があったんですか？

加藤木 : いや。それが最初は全然興味なくて。バスケットやってたんですけども、それにずっと夢中で。そこから高校選びのときに、「(将来) 体動かす仕事がしたいな」と考えて園芸高校を選びました。

米野 : 体を動かすってことと、園芸がすぐにつながったのは、すごいですね。

加藤木 : そうですね。母と姉が園芸高校出身で高校に何度か行ったことがあって、そのときに知りました。

米野 : じゃ、身近な学校だったんですね。

加藤木 : そうですね。

米野 : 高校では実際にどんな勉強をしたんですか？

加藤木 : 1、2年生のときは全般をやります。盆栽、野菜、果物、花、造園といろんな分野をやった後に、3年生で選択ができて、そこで造園に進みました。

米野 : 実際には、どういうことをするんですか？

加藤木 : ガーデニングショーというものに造った庭を展示して、お客さんに見ていただくという授業と、あとは今仕事でもやっている、木の手入れをやってました。

米野 : そして今の会社にはどのような経緯で入られたんですか？

加藤木 : 「やるなら極めたいな」と思っていたんで、それを先生に話したところ、先生が就職先を紹介してくれて、見学に行って「ここに行こう」って決めました。

米野 : 最初の仕事って覚えてます？

加藤木 : 最初現場行ったのは、たしかマンションだったんですけど……そのマンションの木の刈り込みをやりました。

米野 : 「刈り込み」っていうのは、「切る」とは違いますか？

加藤木 : そうですね。植木屋さんと言われて思いつくあの大きい、両手でバシバシ切っていくハサミで、形を四角く切ったり、まるく切ったりすることを「刈り込み」っていうんですけど、その「刈り込み」をやりましたね、最初は。

米野 : どうでしたか？

加藤木 : 最初、緊張しかなかったです……上司にも「高校でやってたよね」みたいな感じで言われて、「どうしようかな」と思って……教えてもらいながらやったんですけど、結局。まあ、緊張したし、何より遅かったですね、一つの木をやるのが。

米野 : 今だったらどれぐらいでできるのを、どれぐらいかかったかって覚えてますか？

加藤木 : 20分ぐらいできるのを、1時間とか、かかってたと思います。しかもできもそこまで

よくなくて、しっかり刈り込めてなかったので時間のむだ遣いでした。(笑)

米野 : そのとき上司の方に何か言われましたか？

加藤木 : いや、覚えてないんですけども、あまりいい顔はしてなかったと思います。(笑)

“心にきた”上司のひと言

米野 : 職人さんの世界は、「見て覚えろ」みたいなイメージがあるんですけど、加藤木さんはどうでしたか？

加藤木 : そうですね、僕にとっては見るだけでは全然分からない世界だったので、見ることもするんですけど、100%吸収するんじゃないで、自分の考えと上司や親方のやってるのを見て、それを踏まえたうえで自分でやってみて、失敗したら変えてみるって感じにしていますね。

米野 : 当たり前のように難しいことですよね。

加藤木 : そうですかね (笑)。

米野 : 親方や上司の方はどういった指導をしてくださるんですか？

加藤木 : 自分と同期のミスを絶対見逃さないの、その仕事に対してひたむきに考えているなという気持ちがすごい分かりました。

米野 : ミスって言うと、その、刈り込みすぎたとかがミスになるんですか？

加藤木 : そうですね。あと掃除ができていなかったりするところも、細かいところまで見てくださっています。お寺に一度入ったときに上司から「植木屋だろう」って言われたことがあって、そのときに「たしかに、素人じゃできないことをやらなきゃな」っていう気持ちにはなりましたね。

米野 : 去年までやってた高校との区切りがついたって感じですか？

加藤木 : そうですね。かなりこのときは心にきました。

米野 : 自信がなくなったり、落ち込んだりすることはなかったですか？

加藤木 : 最初の1か月ぐらいは相当落ち込みました。もう、「自分(この仕事に)向いているのかな」と思ったりもしたんですけど。

米野 : 実際に失敗が続いたとかそういうことなんですかね。

加藤木 : そうです。そういうのもあるし、あと、「実際にちゃんとした仕事できてないな」と思うことが多かったの、そういう面で考えすぎて落ち込むこともありました。

米野 : 親方に認めてもらえたなと思った瞬間ってありますか？

加藤木 : 認めてもらえたというか……初めて松の手入れをやったときに、「うまいじゃん」みたいに言われて、そのときはちょっとテンションあがりました。

米野 : 相当うれしいってことですよ。

加藤木 : そうですね。

米野 : 植木職人のお仕事の魅力ってどんなところですか？



このページ掲載の文章・画像の無断転載を固く禁じます。

加藤木：体を使うのでしんどいときがかなり多いんですけど、でも一つの庭を作り終わったときとか、あと木の手入れが一つ終わってきれいになったところを見ると、感動するというか、「できたな」という気持ちになって、そこはかなり魅力的だと思います。

居心地がいい落ち着く庭を造りたい

米野：加藤木さんがお仕事をされてる中で、好きな音ってありますか？

加藤木：人が木を手入れしてるハサミのパチンパチンっていう音は結構好きですね。

米野：自分が出してる音じゃなくて、人が出されてる音が好きなんですか？

加藤木：そうですね。自分がやっているとときだと集中しててあまり耳に入ってこないですね。

米野：視界に集中してるんですか？

加藤木：そうですね。

米野：加藤木さんは高校で造園を学ばれましたが、就職後に技術を身につけるってことも可能ですか？

加藤木：はい、可能だと思います。僕自身も、さわりだけ高校でやったって感じだったので。現場に入ってからちょっとずつ奥を知っていったって感じです。なので、全然身につけることは可能だと思います。

米野：大学とかでも造園を学ぶことってできるんですか？

加藤木：はい、学んでる人もいます。

米野：加藤木さん自身は、この後のステップアップとしてどんなことを考えられていますか？

加藤木：そうですね、いちばん身近な目標だと、高校のときに造園技能士検定で2級を取ったのがかなりうれしかったので、その1級もとれるように、合格できるように頑張ってます。

米野：頑張ってください！

加藤木：ありがとうございます。

米野：植木職人として力をつけていくために、加藤木さんは何が大事だと思いますか？

加藤木：今の自分がどれだけの仕事をできるのか自覚することがいちばん大切だと思っています。できないことは一生懸命早く覚えて、できることはもっと早くできるようにしていくのが大切だと思います。

米野：加藤木さんは将来どんな職人になりたいですか？

加藤木：同年代の職人には絶対負けたくないんで、業界の中で技術を持ってる職人でありたいっていう気持ちが強いです。上司のように全部の仕事に目が配れるような植木屋さんになりたいですね。

米野：じゃ、高校のときの友達も今はライバルですか？

加藤木：そうですね（笑）。

米野：将来「こんな庭を造りたい」という夢ってありますか？

加藤木：自分は今、日本にある庭が好きなので、今あるものを維持して、日本らしさというものを大切にしていけるような庭が造りたいと思っています。

米野：じゃあ、新しくてビックリさせるようになっていうのではなくて、今あるものを大事にし

ていきたいって感じなんですか？

加藤木：はい。居心地のいいような落ち着いた庭がいいなと思ってます。

米野：自然と調和させることを、目指してらっしゃるんですね。

加藤木：そうですね。今、自転車で50分かけて通勤してるんですけど、会社まで行くまでに、街路樹や家の庭の木がチラッと見えるんですけども、そういうの見ていて、やっぱり「日本はどこ行っても木があるな」と思うので、「そんな当たり前な感じを当たり前でできるようにしたい」と思ってます。

米野：やっぱり普段生活していると、プライベートなときでも木って目に入ってきますか？

加藤木：かなり見ますね。「この木、大変そうだな」とか思ってしまう。

米野：そうなんですか。街の木々の景色っていうのは、そういう植木職人さんの力があってこそその丁寧なお仕事だったんだなって、今日改めて感じました。

加藤木：ありがとうございます。

★あなたの身の回りにはどんな木がありますか？ それはだれが手入れをしていますか？

.....
.....
.....

★仕事を始めたばかりの新人は、どんな心構えが必要だと思いますか？

.....
.....
.....

★未来を見据えて取り組む仕事には、植木職人以外にどんなものがありますか？

.....
.....
.....

.....
.....
.....
.....
.....